

音楽研究室における卒業研究の取り組み（Ⅰ）
— 学生たちが創作した「みんなのうた」を中心に —
Graduation Research Efforts in Music Laboratory:
Focusing on "Minna no Uta" Created by Students

渡邊寛智
(保育学科)

キーワード：卒業研究、音楽教育、オンライン

1. はじめに

令和 2 年度は新型コロナウイルスに翻弄される一年であった。授業日程は大幅な変更を求められ、感染症対策のために遠隔授業が導入されるなど、何事も例年通りということが難しい中で音楽表現のあり方についても新しい方法が求められた。音楽研究室における卒業研究の活動内容も、実践的な活動や発表を大幅に変更せざるを得ない状況であった。本稿では、新型コロナウイルスの影響を受けた中で、学生たちの卒業研究の取り組みの中から創作された子どものための歌である「みんなの詩」を中心に、今年度の音楽研究室における卒業研究の取り組みについて、その成果と課題を報告する。

2. 学生たちによる「みんなのうた」の研究

1) 音楽研究室における卒業研究の活動内容

令和 2 年度、卒業研究で音楽研究室に在籍した保育学科 2 年生の学生は 6 名である。5 月半ばから 2 つのグループに分かれ個々のテーマについて研究を進めることになった。「海外から日本に伝わり歌われる童謡・唱歌について」というテーマで、海外から日本に伝わった童謡・唱歌¹⁾の研究を行うグループと、「みんなのうたの変遷に関する研究」というテーマで、NHK の音楽番組「みんなのうた」²⁾で放送された楽曲と時代背景の関係性について研究を行うグループである。

音楽研究室では毎年、学生たちが興味あるテーマを自ら設定し、1 月に開催される卒業研究発表会に向けて研究を進める。ただし、音楽研究室の研究は実践的な内容も含まれるので、論文の執筆とは別に演奏による実践的な研究も同時に行なっている。演奏する曲目は研究のテーマに関係した作品を取り上げ、秋学期に松江市内の乳幼児施設などで小規模な発表会を開催している。今年度も例年と変わらぬスケジュールで春学期から演奏会に向けて練習を行う予定であったが、新型コロナウイルスの影響により練習時間が確保できない状況が続いた。その後、

新型コロナウイルスの感染が収束しなかったこともあり、今年度の乳幼児施設での演奏会は断念することにした。

12月、卒業研究発表会で行われる予定であったポスター発表が感染症対策の観点から見送られることになり、その代わりとしてオンライン形式での卒業研究発表会が行われることになった。乳幼児施設での演奏会ができなくなり、卒業研究発表会もオンラインで行われることから、学生たちに演奏を発表する機会を設けなければならないと考え、卒業研究発表会で学生たちの研究発表と併せてオンライン演奏会を行うことにした。

2) 「みんなの詩」が作詞・作曲された過程

NHKの音楽番組「みんなのうた」を研究する学生たちは、6月頃から「みんなのうた」で放送された作品と時代背景の関係性についての調査を進めていた。秋学期になると感染症対策を行いながら、オンライン演奏会に向けて練習も研究と同時に進められるようになった。学生と研究の話をしている中で、自分たちの手でNHK「みんなのうた」で放送されているような歌を創作することができないだろうか、という提案を投げかけた。このような投げかけを行ったのは、研究を行う学生たちが「みんなのうた」をイメージした作品を創作することによって、自分たちが研究で行っている「みんなのうた」の作品と時代背景の関係性についての調査に終わることなく、音楽的な面から「みんなのうた」について探求することができる考えたからである。一つの「歌」を作品として創作するためには、歌詞に付ける言葉、その言葉に付けるメロディを考えなければならない。この作業は決して誰にでもできることではないが、幸いなことに今年度の学生の中に幼少の頃からピアノに親しみ、作曲・編曲を行うことができる学生がいたので、敢えて難易度の高い提案を行うことにした。学生たちはこの提案を受けて少しハードルが高いのではないかと戸惑う様子であったが、完成できるかわからないが歌の創作を行うことを決めた。

歌の作詞・作曲を行う場合、作詞を行って、その歌詞に旋律を付ける場合と、旋律を先に作って、歌詞を後付けする場合がある。学生たちはまず、グループのメンバー3人そろって作詞に必要なキーワードとなる言葉を思いつくままに出し合った。その言葉とは、作品の中にも出てくる「嬉しい」「楽しい」「悲しい」「笑顔」「耀く」「未来」などである。ある程度キーワードになる言葉が出そろったところで、学生の一人がそれを取りまとめ、歌詞にまとめた。その後、作曲ができる学生とともに歌詞を口ずさみながら旋律をつける作業を行った。その際に、歌いやすくなるように歌詞の一部を変えたり、旋律と歌詞のバランスを整える作業を行った。その作業を何度も繰り返すことで一つの作品を完成させたのである。

3) 追加された2番の歌詞

学生たちが初めて作詞・作曲を行った歌を聴かせてくれたのは11月半ばであった。タイトルはNHK「みんなのうた」を研究しているということで「みんなの詩（うた）」というタイトルに決まった。これを聞いたときは多少呆気にとられ、駄洒落のようなタイトルから簡単な歌なのだろうと想像していたが、聴かせてくれたのは本格的な音楽作品であった。本格的な作品であるにもかかわらず1番の歌詞しか用意していなかったため、音楽が唐突に終了してしまう不自然な終わり方になっていた。この意見を学生たちに伝えて話し合いを行った結果、学生たちは2番の歌詞を新たに作詞することになった。この2番の歌詞であるが、多くの童謡・唱歌、また一般的な歌謡曲の場合、1番、2番の旋律は変わらずに歌詞だけが変化する場合が多い。ところが、学生たちが新たに用意した2番の歌詞は、

2番の歌いだしの旋律を変化させ、2番の歌詞が歌いやすいように所々で旋律を変化させていたのである。このように1番、2番の旋律が変化する場合、音楽的に歌う側も聴く側も違和感を覚える場合があるが、学生たちの作品にはあまりそれを感じることがなかった。さらに、2番の歌詞で驚いたのは、研究室のメンバー6名の名前の漢字を一文字ずつ歌詞の中に入れていたということであった。ただ作詞をするだけでも大変な作業であるにもかかわらず、自分たちの名前の漢字を歌詞の中に入れるという自由な発想や遊び心に感心せざるを得なかった（図1）。

「みんなの詩」 ^{うた}	
作詞・作曲／保育学科音楽研究室有志	
「苦しい」「悲しい」も みんなで歌えば	うまくいかない一日もあるさ でもそんな日はかじじゃないから
「嬉しい」「楽しい」に かわるはずだから	ぜんぶみとめ顔をあげて 歌っていればいいんだよ
みんなの歌が響きあえば ほらみて笑顔が輝きだした	友と口ずさむメロディーが こぼれた涙も笑顔にかえた
心ひとつに歌いあえば ほらみて広がるみんなの輪	夢を描いて歌いあえば 実った音 ^{うた} が未来に届くんだ
かわらない気持ち未来へ届け	遥か彼方の虹の向こうへ
空にかざそうピースサイン	空にかざそうピースサイン

図1:「みんなの詩」の歌詞カード
※学生の名前の部分は色付けされている

3. オンラインでの発表会からYouTubeへ

1) 卒業研究発表会でのオンライン演奏会

今年度、保育学科卒業研究発表会は昨年度から取り入れられたポスター発表での開催が難しいことから、オンライン形式の卒業研究発表会に変更されることになった。学生たちはポスター発表の代わりに、10～15分程度の発表用の動画を作成し、その動画にナレーションを付けるという方法が採られた。音楽研究室で

も発表用の動画を作成した上で、そこに 10 分程のオンライン演奏会の動画を付け加えた。「海外から日本に伝わり歌われる童謡・唱歌について」というテーマで研究を行うグループは、アメリカ民謡の「線路は続くよどこまでも」、フランス人のルソーが作曲した「むすんでひらいて」を選曲した。「みんなのうたの変遷に関する研究」を行うグループは、アンジェラ・アキ作詞・作曲による「手紙～拝啓 十五の君へ～」と、学生自ら作詞・作曲を行った「みんなの詩」を選曲し、2 グループで計 4 曲を演奏することにした。プログラムの順番は以下の通りである。

【オンライン演奏会プログラム】※演奏時間は約 10 分

1. 線路は続くよどこまでも
2. むすんでひらいて→見渡せば
3. 手紙 ～拝啓 十五の君へ～
4. みんなの詩

1 曲目の「線路は続くよどこまでも」は、木琴、タンバリン、カスタネット、鈴、ウッドブロック、ピアノを演奏しながら歌った（図 2）。2 曲目の「むすんでひらいて」は、現在歌われている歌詞を歌った後で、明治時代に「見渡せば」という歌詞で歌われていた当時の歌を再現した。3 曲目の「手紙 ～拝啓 十五の君へ～」は、2008 年に NHK「みんなのうた」で放映された作品であり、同年の NHK 全国学校音楽コンクールの中学校部門の課題曲として歌われていた作品である。この曲は、1 名がピアノ伴奏を担当し、残りの 5 名が女声 2 部合唱で演奏した（ソプラノ 2 名、アルト 3 名）。最後の学生が作詞・作曲した「みんなの詩」については、全員で斉唱を行った。

卒業研究発表会でオンライン演奏会を見た学生からは、「少人数なのにクオリティが高い」「楽しそうに演奏しているのが良く伝わってくる」「自分たちで作詞・作曲することが素晴らしかったです」など概ね好意的な意見が寄せられた。このオンライン演奏会の動画は、ストリー



ームに保存したものを

図 2：卒業研究発表会におけるオンライン演奏会の様子 チームズから視聴できるようにしたため、学外の方に試聴していただくことがで

きなかった。学外に配信することも考えたが、著作権の問題などもあり卒業研究発表会での学内配信とした。

2) ユーチューブ (YouTube) を用いたオンラインでの発表

卒業研究発表会で好評を博した「みんなの詩」を学外に向けて発表できないかと考え、学生たちと話し合いを行った。本来であれば子どもたちの前で披露したいところであるが、新型コロナウイルスの感染拡大により子どもたちの前で発表すること自体が困難であることから、「みんなの詩」を動画サイトユーチューブで発表することにした (図 3)。

ユーチューブで動画を公開するにあたり、ユーチューブを使用する上でのリスクがあることを考え、動画公開は限定公開にすることも考えた。限定公開とは、誰でもが動画を見られるのではなく、動画の URL を知るものだけが視聴できる公開方法である。しかし、この方法の場合、動画の URL を知らなければ視聴する



図 3 : ユーチューブの音研チャンネル

ことができないことから多くの方にこの歌を知っていただくために通常公開にした。なお、動画の設定は「子ども向け」にして、無用なトラブルを避け

るためにコメントなどの入力もできないように配慮した。

公開する動画は、卒業研究発表会で使用したものではなく、新たにユーチューブで使用する動画を撮影することにした。また、撮影の際に視聴する方に向けて話す内容も、予め台本にまとめてから撮影に臨んだ。台本にまとめた理由は、卒業研究発表会の動画撮影の際にも予め話すべき内容を決めていたが、何度か撮影するたびに話す内容が少しずつ変わっていたので字幕を付けることが難しかったからである。ユーチューブでは、スマホなどで視聴する方が多いと思われたことから、予め台本を用意して、その内容と変わらぬ字幕を付けて少しでも視聴する方が見やすくなるようにした。撮影当日、学生たちは卒業研究発表会後に試験などが控えていたにもかかわらず素敵な演奏を披露してくれた。

ユーチューブで動画を公開した後、学内外の多くの方々に動画を視聴していただいた。学生の周りの友人、知人からも好意的な意見が寄せられた。特に、1番、2番の最後に歌われる印象的な「空にかざそうピースサイン」(図 4)のフレ

ーズを動画に合わせて歌った、実際に空に向けてピースサインをかざした、という方もいらっしゃったようである。



図 4 : 「空にかざそうピースサイン」の楽譜部分

3) 取材を受けての「気づき」

今回、ユーチューブを撮影する際に、山陰中央新報社の糸賀淳也記者³⁾に取材をしていただいた。掲載された記事は、学生の活動や「みんなの詩」を創る過程など、学生の思いが汲み取られた内容になっていた(図 5)。また、糸賀記者のアイデアでユーチューブの URL を表す QR コードを紙面の中に掲載していただき、読者の方が簡単にユーチューブにアクセスできるための工夫をしてくださった。その工夫のおかげでユーチューブの再生回数が増加し、多くの方に学生の歌を聞



図 5 : 山陰中央新報で紹介された「みんなの詩」

山陰中央新報 2021 年 2 月 23 日朝刊

までのプロセスも、糸賀記者の質問によって初めて事細かに知ることができた。

いていただく事ができた。

取材のときに、糸賀記者から学生に様々な質問がなされた。私が学生に質問をするよりもさらに深く、学生に対して質問をしてくださったのである。この質問に対して学生も、今までなんとなく考えていた部分を、記者の方に対してきちんとした回答をしなければならない。なんとなく考えていた部分をはっきりするまで考えることが学生にとって新たな気づきや学びになっていた。例えば、前述した歌詞が完成する

今回の取材を受けたことで、学生も教員も改めて今年度の活動について考え直したり、問い直したりすることが出来たのである。今後、この取材を参考にして、学生の新たな気づき、発見ができるような問いを学生たちに投げかけたい。

4. まとめ

今年度は新型コロナウイルスの影響によって、音楽研究室における卒業研究のあり方を考え直さなければならなかった。毎年行っている乳幼児施設での発表会は、感染症対策の観点から実施することが困難となり、オンライン演奏会というこれまでに経験したことがない方法で発表を行うことになった。誰もが新型コロナウイルスの影響を受けて、当たり前の日常生活を送ることが出来ない中で、学生は子どもたちのために「みんなの詩」を作詞・作曲を行った。その内容は、新型コロナウイルスのために我慢を強いられている子どもたちが、歌うことで明るく元気になってほしいという願いが込められたものである。また、2番の歌詞では子どもから大人に成長した学生が同世代の友人や今を生きる人々全てに向けた応援歌的な内容となっている。もちろん、演奏だけではなく NHK「みんなのうた」についても、これまでに発表された作品を調べ、楽曲が持つ意味と時代背景の関係性について丁寧に研究を行った。もう一方の「海外から日本に伝わった童謡・唱歌」を担当したグループも熱心に研究を行い、2つのグループがお互いに良い影響を与え合っていた。オンライン演奏会では、1962年にNHK「みんなのうた」で放映されて日本の子ども歌として定番化しているアメリカ民謡の「線路は続くよどこまでも」を取り上げたことで、自然と互いの研究内容を熱心に話し合っていた。実際に対面での演奏会は行うことが出来なかったが、その代わりにオンライン演奏会やYouTubeでの演奏発表を行ったことで、音楽表現の新しい発表のスタイルを経験したことは、学生が保育の現場に出た際にひとつの選択肢として役立つであろう。また、山陰中央新報社の糸賀記者に取材をしていただいたことは教員・学生にとって貴重な機会となった。このような機会をいただいた糸賀記者に心より感謝申し上げたい。

今年度の音楽研究室の卒業研究では、2つのグループの研究の中に共通する要素があったことによって互いの研究に興味を持つようになったこと、さらに新型コロナウイルスの影響によって音楽表現の新しい発表方法を実践できたことは、今年度ならではの特徴的な学びであったと考える。来年度以降も感染症対策を引き続き行わなければならないが、どのような状況であっても学生が音楽の学びに支障がないように方策を考えなければならない。

【注】

1) 子どもたちの歌う童謡・唱歌の中には、「むすんでひらいて」「ちょうちょう」

「ぶんぶんぶん」「大きな栗の木の下で」「線路は続くよどこまでも」など、明治から昭和にかけて海外から日本に伝わった童謡・唱歌がある。

2) 1961年にNHKで放送が開始された歌とアニメーションによる5分間の音楽番組。

3) 山陰中央新報社の記事、記者氏名についての掲載は許可をいただいている。

引用・参考資料

川崎龍彦(2006)「「みんなのうた」が生まれるとき」ソフトバンククリエイティブ株式会社

山陰中央新報「県立大発みんなの詩」2021年2月23日朝刊掲載

YouTube「音研チャンネル」(2021)「「みんなの詩(うた)」島根県立大学短期大学部 保育学科 音楽研究室」

<https://www.youtube.com/watch?v=LaIz1q7ubIM&t=69s> (2021年2月22日閲覧)

【QRコード】

